

わたしの好きな昔話（16）

『六歌仙』（ちりめん本）



天野 茂雄



花の色は うつりにけりな いたづらに
わが身世にふる ながめせしに

これは平安時代初期に編纂された『古今和歌集』に出てくる和歌の一つで、六歌仙の一人である小野小町が詠んだ和歌の代表的な歌です。この歌が有名な理由は、皆さんが小さい頃にやったであろう小倉百人一首に出てくる和歌の9番目の歌だからです。私は、先ほど六歌仙という言葉を書きましたが、皆さんは六歌仙と聞いて何を想像しますか？6人の仙人、それとも6個の有名な和歌でしょうか？

六歌仙というのは『古今和歌集』の仮名序において、紀貫之が批評した六人の歌人（小野小町、在原業平、僧正遍昭、文屋康秀、喜撰法師、大伴黒主）のことを指します。

本の内容については、このちりめん本の解説を一部抜粋したものを次に記します。

《序文では、六首の歌の編纂について、表紙に書かれた六歌仙の絵などについての説明で一部「三十六歌仙」（藤原公任が編纂した『三十六人撰』に載っている和歌の名人36人のこと）と混同しているふしがあり、歌人の説明で在原業平

を小野小町の恋の相手と書いている点でも誤りが見られる。しかし、和歌のもつ言葉の流麗な響きを、さらには巧みな言葉遊びをそのまま英語に訳すことの難しさを述べた解説は、的を射たものである。

なお、標題紙や奥付に絵師の名は記載されていないが、それぞれの絵には「紫山」をはじめ異なる絵師の落款が見られ、彼らの詳細は不明だが、複数の絵師によって描かれていることがわかる。》（京都外国語大学 図書館ホームページより）

最近では百人一首などの和歌を題材としたアニメも放送されています。和歌というものは古いものと皆さん思いがちですが、詠んでいくと四季折々の情景や歌人が思った感情などを美しい日本語で表現しているため、詠んでいくにつれて感動できるのではないのでしょうか？

時代を超えて、現代の私たちにも感動を与えてくれる和歌にもっと親しんでいくことが必要だと思います。

あまの しげお（英米語学科4年次生）